

吉原雀（筐花乎向橘）

へ俳優の昔を今に教草 吉原雀の古事をこゝに移して三つ扇 誰も三升とやつし事 へ凡そ生けるを放つこと 人皇四十四代の帝 元正天皇の御宇かとよ 養老四年の中の秋 宇佐八幡の託宣にて 諸国に始まる放生会 へ浮寝の鳥にあらねども 今も恋しき独り住み 小夜の枕に片思ひ 可愛い心と酌みもせで 何ぢややら憎らしい へ其手で深みへ浜千鳥 通ひ馴れたる土手八丁 口八丁に乗せられて 沖の鷗の 二挺立ち 三挺立ち 素見ぞめきは掠鳥の 群れつきつゝき格子先 叩く水鶏の口豆鳥に 孔雀ぞめきで目白押し 見世すががきのてんでつとん サツサ押せくゝ工 へ馴れし廓の袖の香に見ぬやうで見るやうで 容は扇の垣根より 初心可愛ゆく前渡り

「サア／＼来たぞ／＼来たぞよ

へさア来たまた来た

「ナニさしがあると

へさはりぢやないか

「さしもすさまじいわ

へまたおさはりか

「おいせんしう頼むぜ

へお腰のものも合点か

「ソレからかさアそこへ置くぜ

へ二階座敷は

「カウ右か 左か

へずつと奥座敷でござります へしんぞそさまは 寝ても覚めても忘られぬ どうぞ二人がこつそりと へ深山の奥のその奥のぐつとの奥の佗住居

「憎いぞへ

へさうした黄菊と白菊の 同じ勤めのその中に きりと呼ばるゝ果敢なさは 年が明くのを待兼ねて やつぱりしたばと呼ばれたく 男故なら楽しみに へ苦界する身を立てるとて 義理一遍のあだつきは 結句心のもめる種 勤めする身も素人も 女子に二つはないわいな

「よしてくれ／＼ よしてくれよ

へ吉原雀の雛から飼はれて 山雀小雀のくちばしなんぞで てれんの初音を聞いてもくんねエ うそどりやないとの 日文の駒鳥 そこの目白が見つけてせきれい 約束雲雀は昼でもよしきり 一寸格子へ顔とり出せとは さりとはひわ鳥 鶯の魂胆秘密は手管のくだかけ 奇妙鳥類籠の鳥 わけも何やらをかしらし へ実に花ならば桜時 月なら最中竹村に その青楼の名にし負ふ 新吉原という雀 今に噂や残るらん